

畑作

白神ねぎ

○長ねぎ栽培について

病害虫が発生しやすい時期となります。圃場を確認しながら適期防除に努めましょう。

【害虫】

タネバエ・タマネギバエ

6月にかけて発生量が多くなります。定植時の薬剤効が切れる頃ですので、早期に防除を行いましょう。

例) スタークル灌注であれば、定植後20日くらいで粒剤による2回目の防除が必要となります。(害虫の発生早まっている+ねぎに薬剤が吸収されるまでの時間を考慮)

【発生しやすい条件】

・定植から25日以上経過 (追加防除が遅れた)

・生堆肥(完熟していない)の投入
・ねぎの連作(残渣がすき込まれた、昨年も発生したなど)

防除対策(ネギハモグリバエ・ネギアザミウマと同時防除薬剤)

ダントツ粒剤 3~6kg/10a

【病害】

今後の防除目標

①6月に入ると、軟腐病・白絹病の防除時期となります。

・6月上旬 → 夏ねぎ 1回目防除
・6月下旬 → 夏ねぎ 2回目防除、
秋冬ねぎ 1回目防除

②6月中旬(梅雨入り前)のべと病予防を忘れずに!!

※近年は「さび病」も多発しますので要注意。

白神きゃべつ

○きゃべつ栽培について

アオムシ・コナガの発生に注意してください。

5月中旬から6月上旬にかけて、気温が上昇して

くと発生量が増えてきます。

定植時に処理した薬剤も切れてきますので、早めの防除を行いましょう。

5月中旬頃 → フェニックス顆粒水和剤 2,000倍液

5月下旬頃 → ジャックポット顆粒水和剤 1,000倍液

6月上旬頃 → アファーム乳剤 2,000倍液

アスパラガス

○アスパラ栽培について

定植をするために畑の準備をしましょう。堆肥を1反歩あたり2tの散布を行ないましょう。

元肥は窒素成分で1反歩あたり20kgとします。根域を確保するために高畝にし、マルチを張りましょう。

露地アスパラでは、春芽収穫後に立茎肥として、窒素成分で1反歩あたり10kgの追肥を行ないましょう。

白神みょうが

○みょうが栽培について

植付け4日目以降は地下茎が込み合いますので、本葉6枚時に間引き作業をして下さい。1㎡当り100本以下で間引きしてダコニールを散布しましょ

う。(1000倍液 100~300ℓ/10a)

また、根茎腐敗苗対策として5月下旬から6月上旬にかけて1回目のユニフォーム粒剤の散布をお願いします。

ユニフォーム粒剤の散布は雨降り前がおすすです。なお10a当たりの散布量は、18kgです。

稲作

営

農

情

報

健苗移植と水管理の徹底で活着の促進を!

1 田植え作業とその後の管理

①田植えから活着まで

○田植え作業は、日平均気温14℃以上(中苗)、できれば最高気温20℃以上の温暖な日に行います。最高気温15℃以下の低温時や強風の時は見合わせましょう。

○田植えの時期は、安全出穂期内に収穫するように決めます。好適出穂期は、出穂後40日間の積算気温で880℃の得られる時期となります。

○山本地区において、日平均気温が14℃以上になる時期と出穂後の積算気温を勘案すると、平年値では5月15日~25日頃が田植えの適期であるため、作業が極端に遅れないよう注意してください。

○植え付け本数は4本/株程度とし、3cm以上の深植えにならないようにします。

○苗の活着には4~5日かかり、気温・水温が高いほど早くなります。田植え直後は活着を促進させるため、水深4cm程度の湛水状態を保ち、保温に努めましょう。

②分けつを促進させる水管理

○高品質・良食味米の生産においては、強勢分けつの確保が重要です。

○分けつは、日平均水温23~25℃、日気温較差が大きい場合に発生が促進されます。

○活着後は、「早朝かん水・日中止水」を基本に、気温が15℃以上の場合は浅水管理としましょう。また、気温が15℃以下の寒い日は深水管理としましょう。

③雑草防除

斑点米カメムシ類は、着色粒発生の原因となり、米の品質低下を助長します。県内の主要加害種であるアカスジカスミカメは、カヤツリグサ科雑草やノビエの穂に産卵し、増殖するため、水田内雑草の防除を徹底しましょう。

○発生草種および雑草の量に応じた薬剤の選択と適切な使用により、効果的な雑草防除を行いましょう。

○除草効果を高めるため、一発処理除草剤を単用する場合は代かき日から10日後までを目安に使用します。処理時期が遅れた場合は、草種に応じて中・後期剤を適切に散布します。

○除草剤散布時の水深は、粒剤では3~5cm、フロアブル剤やジャンボ剤、豆つぶ剤等では5~7cmとし、薬剤が拡散しやすいようにします。

○除草剤散布後7日間は止水とし、排水路への落水やかけ流しはしません。田面が露出すると効果が低下するため、水が少なくなってきたらゆっくりとかん水します。

○水田周辺の水系など環境に配慮し、移植前の初期剤の使用は極力避けてください。やむを得ず移植前に使用する場合、使用時期は移植7日前までとなります。

